慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アテネ・オリンピック報道にみる外国関連報道 : テレビニュース番組の内容分析から
Sub Title	Foreign-related information appeared in reports on theAthens 2004 Olympic Games: A content analysis of TV newsprograms
Author	上瀬, 由美子(Kamise, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2007
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.57 (2007. 3) ,p.83- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 外国関連報道が構築する世界像(2)
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20070300-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アテネ・オリンピック報道にみる外国関連情報

――テレビニュース番組の内容分析から――

上瀬由美子

本研究では，2004年アテネ・オリンピック（以下，アテネ五輪と表記）時のニュース番組分析を通し，五輪報道の中に外国・外国人に関する情報がどのような形で含まれているのか明らかにすることを目的としている。

2004年８月に開催されたアテネ五輪には202の参加国・地域から11,099人が参加し，28競技，301種目が行われた。日本のメダル獲得数は計37個と過去最高で，アメリカ103個，中国63個，ロシア92個，オーストラリア49個に続き，世界第５位となった。そのうち金メダルは16個で，これは東京オリンピックの18個に次ぐ多さであった。北島康介（競泳）・野口みずき（女子マラソン）・室伏広治（男子ハンマー投げ）らの活躍のほか，体操男子団体総合，柔道，女子レスリングの金メダル獲得が連日賑やかに報道された。

アテネ五輪では，放送量の多さでも特徴的であった。NHKでは総合・BSI・ハイビジョンの３波をあわせて約860時間，地上波デジタル225時間という編成で放送を行った。また，NHKとジャパンコンソーシアム（JC）を組む民放は，165時間，BSデジタル160時間の放送を行った。長時間放送の背景には，選手の好成績だけでなく，テレビ局側の事情も関連している。近年の五輪では開催費の上昇とそれを支えるための放送権料の高騰が問題となっているが，今回JCがIOCと契約した放送権料は１億5,500万ドルで，今までの五輪の中ではもっとも高いものとなっている（この額の75%をNHK，残りを民放が負担した）。この放送権料を回収すべく，各局，特にNHKが長時間放送を行ったと指摘されている（杉山，2004）。

五輪はスポーツの祭典として世界中の人々に注目され，また多くの国から選手が参加している。このため五輪ニュースは，各種の試合や関連報道を通して様々な国のイメージを変化させる機会になっている。五輪と外国イメージに関する過去の研究（例えば高木・坂元，1991；村田・坂元・高木，1993；Sakamoto, Murata, & Takaki，1999；向田・坂元・村田・高木，2001；高林・村田・稲葉・向田・佐久間・樋口，2005；樋口・村田・稲葉・向田・佐久間・高林，2005など）では，様々な方向からイメージ変化が分析されている。五輪が外国人イメージに肯定的な影響を与えるのか，否定的な影響を与えるのかについては，一貫した結果は示されていない。例えば，日本の成績が悪かったソウル五輪では，成績のよかった韓国に対する好意度が低下したことが示されている（高木・坂元，1991）。逆に，日本の成績がよかったバルセロナ五輪では，諸外国の好意度，特に開催国スペインと成績のよかった国に対する好意度が上昇したと分析されてい

る（Sakamoto et al., 1999）。これらの研究では，日本の成績の良否と，それに関連する自尊心の脅威がイメージ変化を左右する中心的な要因として位置づけられている。また，マスメディアによる「単純接触効果」（Zajonc, 1968）も，肯定的なイメージ変化を生じさせる要因のひとつとして推察されている（例えば向田ら，2001）。

その一方で，成績がよかった五輪でも，特定の国に対するイメージが否定的なままである傾向もみられた（例えば向田ら，2001）。冒頭で述べたアテネ五輪でも，ハンガリーや中国に対する好意度の低下や，ギリシャや中国に対する能力評価の低下が報告されている（樋口ら，2005；向田・村田・稲葉・佐久間・樋口・高林，2005；村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林，2005；佐久間・村田・稲葉・向田・高林・樋口，2005；高林ら，2005）。五輪による外国イメージの否定的変化について向田ら（2001）では，もともと否定的な刺激に対しては単純接触効果がおきにくいとの知見（Brickman et al., 1972）を解釈に用いている。また樋口ら（2005），向田ら（2005）では，報道されたニュースの内容がイメージ変化に影響を与えたと論考している。高木・坂元（1991）でも，ドーピング問題といった報道内容が特定の国に対する否定的イメージ変化に結びついた可能性を指摘している。

このように既存研究からは，五輪による外国イメージ変化には，メディア情報の内容が関係していると推察されている。しかし，実際に外国・外国人に関するどのような情報が，どの程度報道されているのか，メディア情報そのものについてはほとんど調査が行われていないのが現状である。

そこで本研究ではアテネ五輪を取り上げ，期間中およびその前にどの程度外国・外国人に関する情報が報道され，またそれはどのような内容であったのかをテレビニュースを題材として分析することを目的とした。テレビニュースを取り上げたのは，多くの人が接触し，且つ信頼度も高いことから，影響力が強いと考えたためである。分析の対象には視聴率の高い平日のプライムタイムに放送されている３つのテレビニュースを分析の材料として用い，量的分析を行うこととした。

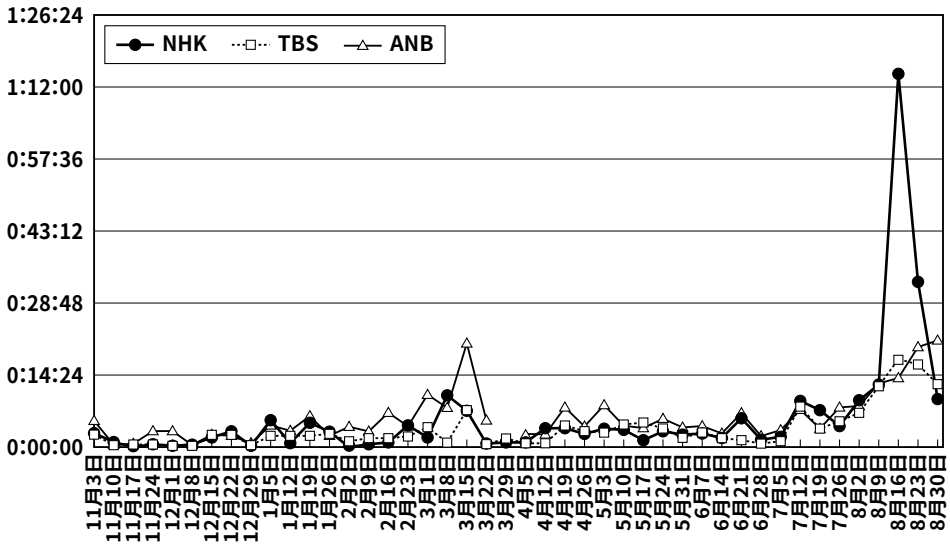
▶方　　法

2003年11月から2004年８月末までの10ヶ月間に報道された，３つのニュース番組（NHK：ニュース10　TBS：ニュース23　テレビ朝日（ANB）：ニュースステーション（途中から報道ステーションに変更））を録画した。対象となった番組回数は，NHKニュース10が212回，TBSニュース23が206回，ANBニュースステーションが201回の計619番組である[1]。これらの番組について，まず，内容をニュース単位に区切って放送時間や内容を記した構成表を作成した。続いて，この構成表をもとに「アテネ」「ギリシャ」「五輪」「オリンピック」のキーワードが入っているニュースを五輪ニュースの分析対象として抽出した。このとき，キーワードの入ったニュースであっても，明らかに今回のアテネ五輪に関係ないものは対象外とした（例：空前の高度成長を続ける中国，北京オリンピックに向けたインフラ整備で世界中の鉄鋼の３分の１が中国の道路や鉄道建設に）。その後，「U-23」「長島ジャパン」などオリンピックを扱っていると考えられるキーワードをもとに再度ニュースを検索し，前述のものに加えた。

脚　注

1．2003年11月７日のニュース23は録画ミスのため分析対象外となっている。８月23日のニュース10は番組延長のため１時間59分58秒までの録画となっており，以降は分析対象外となっている。

図1　五輪ニュースの報道時間の推移（1日の報道時間の平均を週単位で算出）



（注：日付はその週の月曜日の日にちを示している）

▶結　　果

1．五輪ニュースの推移

(1) 五輪ニュースの量

分析対象として抜き出されたニュースの報道時間を計り，番組別に１週間単位（月～金）で１日の平均報道時間を求めたのが**図１**である[2]。

グラフのとおり五輪ニュースは，2004年（開催年）の年明けから報道量が徐々に増加しはじめている。さらに３月12日からの週（５ヶ月前）や，７月12日からの週（ひと月前）など，節目節目に数値の上昇がみられる。ただし報道量が大きく増えるのは８月に入ってからで，五輪開幕直後の週（８月16日からの週）がそのピークである。

五輪開催以前にも，スポーツイベントや五輪関係の事件があったときは，その時々で報道時間が上昇している。たとえば３月15日はマラソンの高橋尚子が代表落選し，それに関連した報道が特にANBで多くなっている。

NHK，TBS，ANBを比較すると，五輪期間中のNHKの報道量が目だって多くなっている。これは，NHKではニュース番組自体が延長することがあったことが反映している。このうち８月18日と８月20日では番組中にそれぞれ１時間17分23秒と１時間29分，試合生中継がニュースの合間に何度か流されたため，値が目立って高くなっている。この両日では，中継時間を除いた番組時間は，５分38秒，５分08秒で，五輪以外のニュースが極端に少なくなっている。

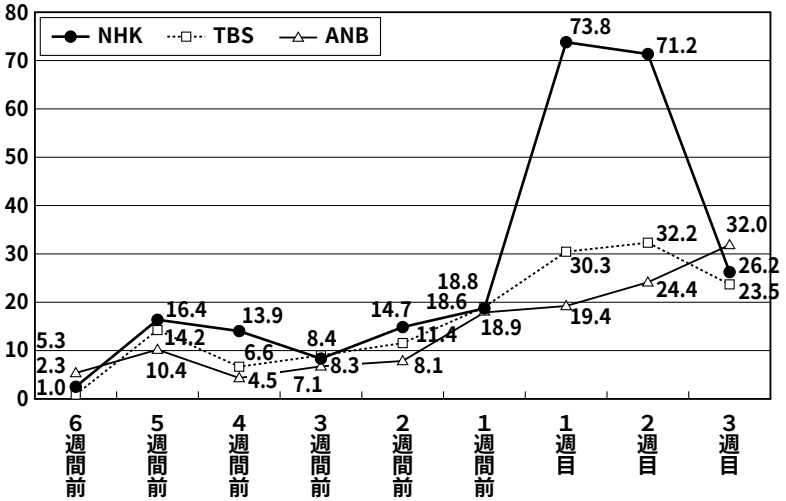
(2) 番組時間内に占める五輪ニュースの割合

番組の中で五輪ニュースが，全ニュースの中のどの位の割合を占めているのかについ

脚　注

2．報道時間の中には，司会者や解説者のコメント時間も含まれている。またオープニングにアテネ五輪情報が含まれていた場合には，オープニング全体の時間をカウントした。

図2　番組全体に占める五輪ニュースの割合（%）



て，五輪開催６週間前（2004年７月２日(金)）から，から開催後の８月末（８月31日）に限定して分析した[3]。

具体的には，各番組の五輪ニュースの報道時間の合計を週単位で出し，その週の合計放送時間で割ったものを指標とした。割合の変化を番組ごとに示したのが**図２**である。

３番組とも開幕前は全体の１～２割程度が五輪ニュースとなっている。開幕直後に報道量は増加し，終了後には急激に低下している。番組を比較すると，NHKは開始直後からの報道量が圧倒的に多く，１週目は74%，２週目は71%と他の２局を引き離している。１回のニュース番組の大半が，五輪ニュースで占められている状況だったといえる。他の２番組は概ね２～３割が五輪ニュースである[4]。なお，３番組全体の平均の推移を図３に点線で示した。開幕前は１割前後，開幕後はおよそ４割が，五輪ニュースとなっている。

２．五輪ニュースに登場する外国

五輪期間中に，どのような国が取り上げられて報道されたのかを明らかにするために，五輪ニュースの中から，外国名あるいは外国人名が取り上げられているものを外国関連ニュースとして取り出した。ただし，外国名が言及された場合でも，日本人選手の合宿地として名前がふれられるのみなど，その国に関する情報が全くない場合は対象外とした。また「シドニー五輪」など過去の五輪に関する言及についても，単に「シドニー五輪の金メダリスト」「シドニー五輪では不調だった」など，その国に関する情報が他に全くない場合は外国関連ニュースには含めなかった。

(1) 外国関連ニュースの推移

７月２日から８月31日に報道された五輪ニュースの中で，外国関連ニュースと分類さ

脚注

3．五輪開催が８月13日の金曜日だったため，６週間前の金曜日の７月２日から翌週の７月７日(木)を６週間前の１週間とし，金曜日から次の週の木曜日までをひとつの週単位として数えた。

4．図２では，前述のNHKの試合中継（第１週目の８月18日，第２週目の８月20日）も含めてグラフを作成している。ただしこの中継時間を五輪報道から抜いて計算しても１週目が88%，２週目が68%となり割合に大きな違いはない。これは，試合中継以外の内容もほとんどがオリンピック関連のものであったためである。

図3　番組に占める五輪ニュースの割合と，
五輪ニュースに占める外国関連ニュースの割合（3番組平均）

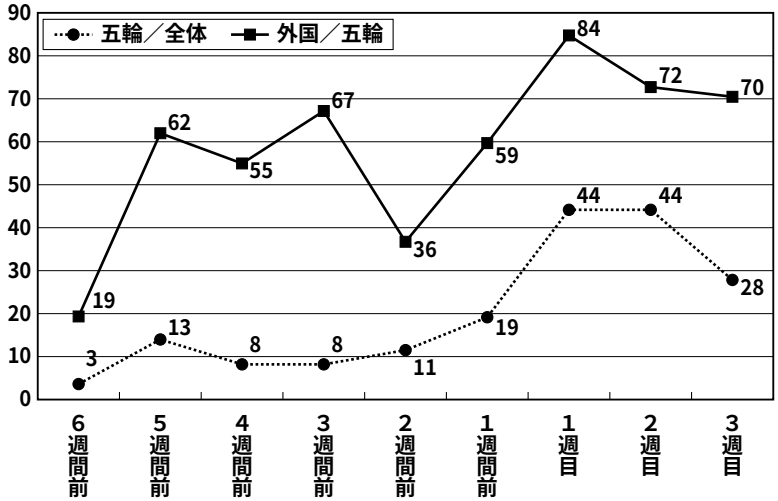


図4　五輪ニュースに占める，外国関連ニュースの割合

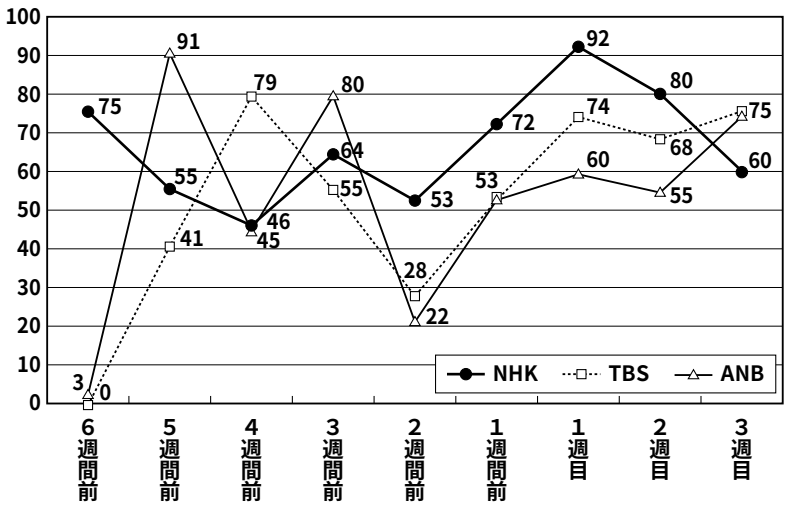


Figure & Table

れたものがどのくらいの割合を占めていたのかを週単位に示したのが**図3**である。ここでは，その週に報道された外国関連ニュースが含まれた報道の合計時間数を分子とし，その週の五輪ニュースの合計時間数を分母として，割合を%で示した。３番組の平均をみると，五輪ニュースの中で外国関連ニュースは開始直前までは５～６割程度であるが，開幕後は７割以上に増加する。

さらに五輪ニュースに占める外国関連ニュースの割合を番組ごとに示したのが**図4**である。開始２週間前までは番組によるばらつきが大きいが，これには，力を入れて報道したスポーツの種類が各局によって異なることも関連している。開幕１週間前から３番組とも外国関連報道の割合が増え，開幕後に大きく増加する傾向は３番組共通している。ただし開幕後の外国関連ニュースの割合は，特にNHKで多い。

図5　五輪ニュースで登場した外国名の延べ回数（3番組合計）

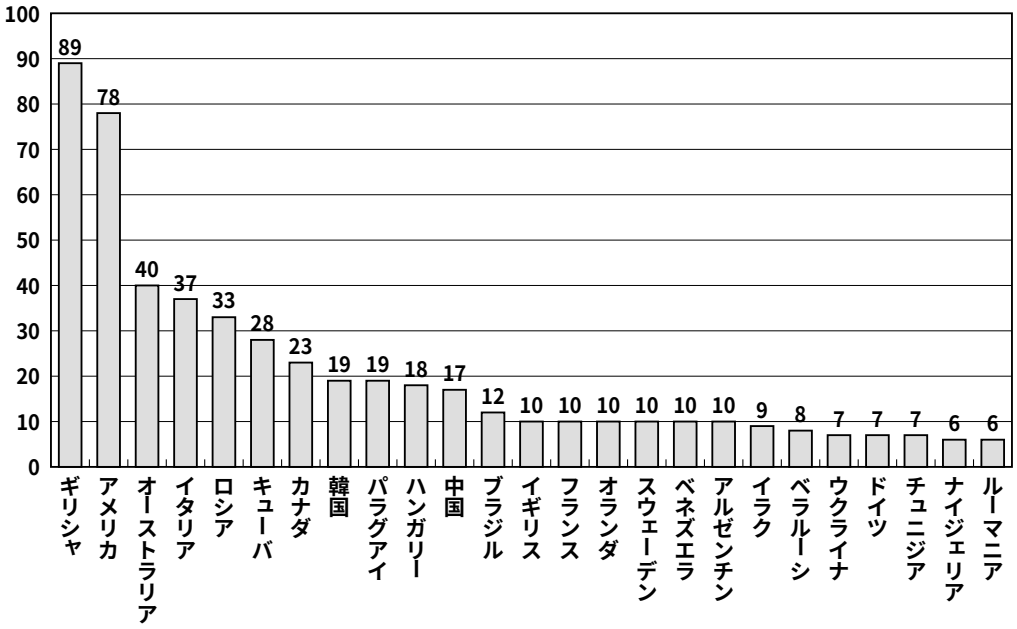


Figure & Table

(2) 報道対象となった外国名

上記の外国・外国人報道について，ニュースごとに，取り上げられた外国の名前を書き出しカウントした。ひとつのニュースに複数の国が取り上げられた場合には，複数をカウントした[5]。その結果，登場した外国・地域は67カ国であった。ただし，報道された頻度には国による偏りがある。上位25カ国を示したのが**図5**である。

67カ国のうち圧倒的に多いのはギリシャとアメリカであった。外国名が登場した延べ回数を分母にして割合を出すと，ギリシャは15%，アメリカは13%で，この両国で外国関連ニュース全体の３割近くを占めている。その他ではオーストラリア，イタリア，ロシア，キューバ，カナダも上位に位置している。

(3) 時期による報道対象国の変化

さらに週ごとに登場した国を集計し，その週の中でどの国が多く取り上げられたかを調べたところ**表1**に示すようになった。

これをみるとギリシャやアメリカが常に報道されているわけではなく，各週で，メディアが注目する国は異なっていることがわかる。

各週で，どの国についてどのような内容が報道されたのかについて，以下代表的なニュースの内容とその見出しを挙げながら簡単に説明する。

〈６週間前〉

７月５日にアテネで火災が起きたため，ギリシャに対する報道がみられる。また女子サッカー前哨戦としてイタリアとの対戦について報道されている。他には，長島ジャパンが次週対戦するキューバの分析を扱った番組もみられている。

脚注

5．NHKの試合中継については，途中に他のニュースが入り，再度別のニュースとして中継が再開される形となっていたため，その都度新たなニュースとして国をカウントした。

●表1　五輪ニュースで登場した外国名―時期ごとの変化（3番組合計　数字はN）―

	合計 登場回数	6週前	5週前	4週前	3週前	2週前	1週前	開始1週	開始2週	開始3週
ギリシャ	89	2	9	2	2	7	22	22	12	11
アメリカ	78	1	3	3	2	1	3	30	22	13
オーストラリア	40	0	1	2	0	0	2	17	15	3
イタリア	37	1	1	2	1	1	3	14	12	2
ロシア	33	0	1	0	1	0	2	2	20	7
キューバ	28	1	12	0	0	0	1	6	5	3
カナダ	23	0	1	0	2	2	0	6	10	2
韓国	19	0	2	5	0	0	2	6	4	0
パラグアイ	19	0	0	1	1	1	5	4	5	2
ハンガリー	18	0	0	0	0	0	0	7	3	8
中国	17	0	1	0	1	0	1	3	8	3
ブラジル	12	0	0	1	0	0	3	0	0	8
イギリス	10	0	0	0	1	1	0	1	4	3
フランス	10	0	0	0	3	0	0	3	3	1
オランダ	10	0	0	0	0	0	1	7	1	1
スウェーデン	10	0	1	0	0	1	7	0	1	0
ベネズエラ	10	0	1	1	1	2	0	3	1	1
アルゼンチン	10	0	0	0	0	0	3	5	2	0
イラク	9	1	1	0	0	0	1	1	5	0
ベラルーシ	8	0	0	0	0	0	0	2	6	0
ウクライナ	7	0	0	1	0	0	0	0	4	2
ドイツ	7	1	0	0	1	0	1	1	1	2
チュニジア	7	0	3	0	0	0	0	2	2	0
ナイジェリア	6	0	1	0	0	0	2	2	0	1
ルーマニア	6	0	0	0	0	0	0	2	3	1
	週合計	7	38	18	16	16	59	146	149	74

Figure & Table

例）ギリシャアテネのオリンピックメインスタジアムで出火（７月５日　NHK）

〈５週間前〉

長島ジャパンが五輪の前哨戦として対戦したことから，キューバに対する報道が多くなっている。ギリシャについても，この時期にスタジアム工事の遅れに関連した報道が多く行われている。

例）長嶋JAPANの宿敵／キューバに潜入！（７月９日　ANB）
オリンピック目前／アテネで大停電（７月12日　NHK）
アテネ五輪／あと１ヶ月　準備は？（７月13日　NHK）
アテネ五輪まで１か月・間に合うんですか（７月12日　TBS）

〈４週間前〉

サッカー五輪代表が，韓国代表と対戦したことから，韓国ニュースが多くなっている。

例）五輪代表・国際親善試合：U-23韓国×U-23日本（７月21日　ANB）

〈３週間前〉

女子バスケットや女子ソフトボールの壮行試合で，対戦国として多様な外国が五輪ニュースの中で取り上げられている。またこの時期には，テロに関するテーマも取り上げられている。

例）アテネ五輪会場をミサイルで防衛／ギリシャ政府に爆発物探知装置がアメリカ

税関より貸し出される（７月28日　NHK）

〈２週間前〉

開幕をひかえ，ギリシャを取り上げる五輪ニュースが再び増加している。また各種壮行会や注目選手に関する記述の中で外国が登場している。

例）アテネ五輪まであと２週間／アテネ五輪会場・選手村の様子（７月30日NHK）
オリンピックまであと８日，続々アテネ入り（８月５日　ANB）
アテネオリンピック女子ソフトボール注目選手/“女のアテネ”世界最速のエース（８月２日　ANB）
サッカー：アテネ五輪壮行試合・日本VSベネズエラ（７月29日　TBS）

〈１週間前〉

開幕直前ということで，ギリシャに関連するニュースが引き続き多くなっている。また，開幕直前に女子サッカーがスウェーデンと対戦して勝利したことから，各番組とも多く取り扱っている。

例）アテネの準備万全宣言（８月６日　ANB）
アテネ・アクロポリスのパルテノン神殿，オリンピックアクアティックセンターメインプールの現在の状況／TBSアテネスタジオより中継（８月７日　TBS）

〈開幕１週目〉

アテネでの開会式の様子を含め，ギリシャ情報が多くなっている。またアメリカ情報も，女子ソフトボールの対戦国であること，金メダルを獲った北島康介のライバル（ハンセン）がアメリカ人であったことから高くなっている。また，男子サッカーの初戦であるパラグアイ戦についても各番組がとりあげている。

例）五輪まもなく開会式／市内のチケット売り場の様子／開会式の入場券は売り切れ」（８月13日　NHK）
競泳男子100メートル平泳ぎ決勝映像／５コース北島・４コースハンセン／北島康介宿敵破り金メダル！（８月16日　TBS）
山本JAPAN惜敗，壮絶！ゴール合戦，日本VSパラグアイ（ANB）

〈開幕２週目〉

開幕２週目は各種競技結果が連日報道され，期間中最も多くの外国名，外国人名が取り上げられている。中でも女子シンクロの日本とロシアの対決が注目され，多くの番組がこれについて取り上げている。

例）シンクロナイズドスイミング：日本立花美哉・武田美保女王ロシアへの挑戦，テーマは「ジャパニーズ・ドール」＝日本人形／ロシアダビドワ・エルマコワ，寸分違わぬ“同調性”で魅了，日本の追い上げをかわし金（８月26日　NHK）

〈開幕３週目〉

ハンマー投げで優勝したハンガリーのアヌシュが薬物違反で捕まったため，ハンガリーが多く登場している。また最終日にはブラジルのデリマが，試合中に乱入してきたアイルランド人に進路を妨害されるという事件が生じたためブラジルの名前が上位に挙がっている。

例）ハンガリー選手薬物疑惑・室伏選手金繰り上げか!?（８月27日　TBS）
デリマ選手はヒーロー／母国ブラジルではテレビや新聞がトップニュースで報道／警備態勢に批判も（８月30日　NHK）

●表2　各記事の内容分類結果（週単位のニュース件数　数値はN）

	社会	文化	対日本（団体）	対日本（個人）	対他国（団体）	対他国（個人）	個人	その他	合計
６週前	4	0	2	1	0	0	0	0	7
５週前	12	1	20	1	0	0	1	4	39
４週前	3	3	10	3	0	0	0	0	19
３週前	5	5	9	0	0	0	0	0	19
２週前	7	5	9	0	0	0	0	2	23
１週前	6	20	23	2	10	0	5	2	68
開始１週	1	16	56	82	12	5	5	3	180
開始２週	5	12	40	60	20	28	11	1	177
開始３週	0	18	10	17	8	20	22	6	101
合計	43	80	179	166	50	53	44	18	633
全体に占める割合（%）	（6.8）	（12.4）	（28.3）	（26.2）	（7.9）	（8.4）	（7.0）	（2.8）	

Figure & Table

3．外国関連ニュースの内容

外国関連ニュースについて，その内容の分類を目的として以下の８つのカテゴリを独自に設けた。

（a）社会：その国の現在の政治情勢や最近生じた事件に関する言及
（b）文化：その国の歴史，食べ物，街の様子などに関する言及
（c）対日本（団体）：団体競技で日本チームの対戦国として言及
（d）対日本（個人）：個人種目で日本人選手の対戦相手として言及
（e）対他国（団体）：日本チームは対戦しない，外国チーム同士の試合について言及
（f）対他国（個人）：日本人選手は対戦しない，外国人選手同士の試合について言及
（g）個人の成績：特定の外国人選手についての言及（日本人選手に関する言及がないもの）
（h）その他：オリンピックのメダル獲得数や選手村での様子など

各外国関連ニュースについて，この（a）～（g）のカテゴリのどこに位置するのか分類した。ただしひとつの記事の中に複数の内容が言及されている場合もあった（例えば，外国人選手の成績を紹介しながら，その国の最近の政治事情なども解説するなど）。その際は，複数のカテゴリにチェックをした。

各ニュースの内容分類の結果を週別に集計したところ，**表２**に示すようになった。

全体を通してみると，対日本（団体）と対日本（個人）がそれぞれ３割弱を占めて多くなっている。両者を合わせると６割近くの言及が，日本チームや日本人選手の対戦相手として紹介し，報道している。それに対し，対日本という文脈を離れて外国チームや個人が紹介される場合は２割程度である。また，参加国の社会や文化についてのニュースもあるが，全体の２割程度である。

また外国についてどのような内容が報道されるかには，時期による変化がみられる。開幕６～５週間前，および開幕１週間前には社会や文化に関する報道が多い。これは，「来月開幕」「開幕まであと一週間」といった区切りで，開催国を中心とした諸外国の事情がニュースとして取り上げられるためである。しかし開幕後は，日本チーム・選手の結果紹介が報道の中心となるため，日本と無関係に諸外国の試合や選手について言及されることはほとんどみられない。ただし，五輪期間後半には，五輪全体の総括として外国チーム同士の様子や外国人選手個人の成績が紹介される割合が増えている。

●表3　登場頻度の高い外国人

種目	名前	国	報道の内容・位置づけ	登場回数
男子水泳	ハンセン	アメリカ	北島康介100m, 200mライバル	12
砲丸投げ	アヌシュ	ハンガリー	室伏広治ライバル／ドーピング疑惑	11
男子水泳	フェルプス	アメリカ	７冠狙い／ソープと自由形200m対決／山本貴志（バタフライ）と争う	7
女子シンクロ	ダビドワ	ロシア	立花美哉・武田美保のライバル	6
女子シンクロ	エルニコワ	ロシア	立花美哉・武田美保のライバル	6
男子水泳	ソープ	オーストラリア	自由形400mと200mに出場	5
女子マラソン	ラドクリフ	イギリス	世界記録保持者／野口みずきのライバル	5
男子水泳	ギュルタ	ハンガリー	北島200mのライバル	4
男子円盤投げ	ファザガシュ	ハンガリー	ドーピングで金剥奪	4
砲丸投げ	ティホン	ベラルーシ	室伏広治のライバル	5
女子棒高飛び	イシンバエア	ロシア	世界記録保持者	4
男子100ハードル	アレン・ジョンソン	アメリカ	世界選手権４連覇なのにまさかの転倒	4
女子シンクロ	パートシック	アメリカ	立花美哉・武田美保のライバル	3
女子シンクロ	コズロバ	アメリカ	立花美哉・武田美保のライバル	3
男子柔道	ファン・ヒーデ	韓国	泉浩の対戦相手	3
男子陸上100	ガトリン	アメリカ	100m世界最速男／200mにも出場し銅	3
女子卓球	ガオ	アメリカ	福原愛対戦相手	3
女子卓球	キム・ギョン	韓国	福原愛対戦相手	3
男子体操	ハム	アメリカ	日本団体対戦相手	3
男子マラソン	デリマ	ブラジル	妨害ハプニング	3
男子柔道	バンデルギースト	オランダ	井上康生 鈴木桂治　対戦相手	3
女子400ハードル	ハルキア	ギリシャ	ギリシャのヒロイン／会場に５万人	3

Figure & Table

4．名前の登場した外国人

2004年８月１日から31日に限定して，この間に登場した選手名と登場回数をカウントした。カウントの対象となったのは，番組内において個人名が文字で提示された場合である[6]。

分析の結果，登場した外国人は男性が97人，女性が74人であった（このうち選手ではない人物は，男性４人，女性１人）。これらの外国人の延べ登場回数は，男性177回，女性121回であった。登場した外国人について登場頻度の高い順に示したのが**表3**である。

上位に登場した選手は，女子シンクロを除いて個人競技の選手である。また，上位の多くの選手が，日本人選手の直接の対戦相手となっている。最も登場回数の多いアメリカのハンセンは，アテネ五輪の象徴となった北島康介のライバルとして，繰り返し報道された。100メートルと200メートルの２回，北島と対決したことも，報道量の多さに影響している。同様に，ハンガリーのアヌシュは室伏広治の対戦相手であり，金メダル獲得後にドーピングでメダルを剥奪されたされたことから報道量が多くなっている。

例外は，イアン・ソープ（オーストラリア），アレン・ジョンソン（アメリカ），ガトリン（アメリカ），デリマ（ブラジル），ハルキア（ギリシャ）で，彼らの試合には日本選手が登場したものもあるが，主役は彼ら外国人選手である。

脚　注

6．外国人選手が画面に映っていても，名前が出ない場合は分析対象から外した。また登場回数はニュースごとに行い，ひとりの選手が同じ日に複数の競技に参加していて，別のニュースの中でそれぞれ名前が登場していた場合には複数カウントとした。

▶考　　察

1．五輪報道とその中の外国・外国人情報

2003年11月から2004年８月末までの10ヶ月間に報道された３つのニュース番組を題材として，五輪情報量の推移を検討した。その結果，年明けから報道量が徐々に増加しはじめていたが，大きく増えるのは開幕後であった。また開幕後は，３番組を平均すると報道時間の約４割を五輪関連情報が占めていた。ニュース番組の内容分析を行った萩原（2001, 1992）によれば，通常時のニュース番組のスポーツ枠は１割強である。これと比較すると，本研究結果の値は圧倒的に多く，五輪は単なるスポーツニュースではなく，社会的イベントとして扱われていたことが改めて確認された。

また五輪ニュースの中で，外国関連ニュースが含まれたものは開始直前までは５～６割程度，開幕１―２週間は７割以上となった。通常時のニュース番組を分析した萩原（2001）では，全体の４分の３が国内ニュースで，外国関連のニュースは相対的に少ないことが明らかにされている。これと比較すると，確かに五輪期間は，テレビニュースによって大量に外国に関する情報が提供されている。また，五輪開幕６週間前から，ニュースに登場した外国名を数えると，67カ国であった。アテネ五輪の参加国・地域は202であるため，このうちおよそ３分の１がニュースに登場したことになる。

ただし提供される情報には偏りがあり，報道対象国についていえばギリシャとアメリカに関するニュースが全ニュースの３割近くを占めていた。さらに外国・外国人情報の内容を分類した結果，その６割近くは日本の対戦相手としての文脈で語られていた。対日本という文脈を離れて，外国チーム同士や外国人選手同士の試合が紹介されたり，外国人選手個人に注目したニュースは２割程度と少なかった。この点から，五輪を報道する側に外国関連ニュースという意識はなく，むしろ「外国で生じている，国内ニュース」といった捉え方で臨んでいるのではないかと考えられる。各番組では五輪期間にしばしば，現地に飛んだキャスターを登場させて生中継を組んでいた。ただしそのほとんどはオリンピックスタジアムの一角かスタジオからの放送で，そこに外国人の姿が映りこむことは少なかった。日本のスタジオと区別のつかない映像を背景として，日本選手の活躍のみが切り取られて報告されるニュースの形からも，五輪を通して諸外国の姿を伝えるという意識の少なさを見ることができる。

もちろん，五輪に関連づけて，諸外国の社会文化が紹介される機会がないわけではない。例えばギリシャについては開幕前に，古代遺跡からの中継や町の様子などが各局で報道されていた。しかし，五輪に関連づけて外国の社会や文化が語られるケースは，外国ニュース全体の２割程度に過ぎない。試合が始まってしまえば外国人・外国人選手は日本選手の成績が紹介される際に，脇役として語られる存在に限定される。

これまで，日本の成績が不振だった五輪では，自尊心維持のために外国のイメージを低下させる傾向があると指摘されてきた。その一方で，特定の国については，日本の成績がよかった場合でもイメージが否定的に変化する場合があることも明らかになっている。本研究で示されたように，五輪時にメディアは外国を日本と対立する存在として明示しやすい。この構造自体が，日本の成績が不振だった場合には特定の国に対するイメージを否定的に変化させ，成績がよかった場合でも注目された国については対立意識を上昇させることに結びついたと考えられる。

ただし五輪が終盤に近づくと，全体の総括として外国チーム同士の様子や，優れた外国人選手の試合結果が報道されるなど，日本チーム・選手とは切り離された外国情報が

提供される傾向が増えていた。向田ら（2001）は五輪で活躍した国は，ポジティブな文脈で報道されやすいため，報道量が増加することによる単純接触効果がでやすいと論考している。五輪後半の時期に限定すればこの論考に対応するような形で外国情報が提示されるため，それがイメージの好意的変化に結びつくことがうかがわれる。

2．提供される情報と外国イメージの変化の関連

前述のように，外国関連ニュースの中で取り上げられる国には偏りがあったが，さらにそこで提供されたニュースの内容にも国による違いがみられた。

ニュース分析の結果，開催国ギリシャは最も多く報道されていたが，他国と異なり日本チームのライバルとしての文脈ではほとんど語られていなかった。さらに古代遺跡の紹介なども含め，社会・文化に関する情報提示が他の国よりも多かった。従って，単純接触効果の知見から推測すれば，ギリシャに対するイメージは，五輪後には好意的に変化する可能性があった。しかし，樋口ら（2005），向田ら（2005）の調査では，五輪後にギリシャの能力評価が低下していることが示されている。このように予想と逆の結果が示されたのは，開幕前に大規模な停電の様子や工事の遅れが集中的にニュースとして取り上げられていたことに原因があると推察される。準備の遅れは，ギリシャ人の能力の低さを印象づけることになった。最終的には無事に五輪がスタートし，終了したにもかかわらず，当初の報道の影響からギリシャに対する能力次元評価が否定的な方向に変化したままだったと推測される。このことからも，五輪による外国イメージの変化は，必ずしも自国との関係のみで予測されるわけではなく，メディアによって報道されるニュースの内容が大きな影響を与えるものと考えられる。

一方ハンガリーは，五輪開幕前には全く報道されることがなかったが，開幕後，特に終盤にドーピング問題と関連して多く登場することになった。国名の報道は全体で10位とさほど多くはないが，選手個人の名前としてアヌシュ，ギュルタ，ファザガシュの３名が挙がっている。これはアメリカに次ぎ，２番目に多い。特にアヌシュはドーピング問題で金メダルを剥奪されたため，アメリカのハンセンについで多く個人名が挙がっている。国が語られた数がさほど多くないにもかかわらず，イメージの大きな変化がみられたことは，アヌシュのドーピング行為がハンガリー全体のイメージ低下に強く結びついたためと考えられる。特定の集団に対する知識や直接接触が少ないものは，当該の集団に関連するテレビ番組が描く形と近似の集団イメージを形成しやすいとされる（例えばSchiappa et al., 2005）。日本のテレビ番組を題材にした研究からも，アフリカのように事前情報の少ない地域に関しては番組視聴効果が強いことが示されている（大坪，2004）。ハンガリーは日本人にとってさほど馴染みのある国ではなく，アテネ五輪以前にハンガリーに関する知識やハンガリー人との接触を多くもっていた日本人は少なかったと推測される。このため，ハンガリーに関する否定的な報道は，日本人が抱くハンガリーイメージに大きな影響を与えたと考えられる。加えて五輪は国という集団アイデンティティが強く意識される場であり，メディアや視聴者側も選手個人を国家に吸収させた形で認識しやすい。別の言い方をすれば，五輪をみるものにとって選手の成績は個人のものというよりも，国のものとして意味づけられやすい。従って登場する外国人（個人）がその国全体のイメージに与える影響は，他のイベントよりも五輪においてはるかに大きいと考えられる。アヌシュは室伏の敵役であり，ドーピングの疑惑対象となってからは，（ドーピングの事実をほのめかすように）ハンマーを投げた直後に弾の行方を追いながら赤い顔をして動物的に雄叫びを上げる映像が繰り返し流されていた。これは，冷静に記者会見に臨む室伏の姿とは対照的で，否定的なイメージを印象づけていた。このアヌシ

ュの否定的な行為や，母国に帰国した後も薬物検査に応じないその後の対応が，五輪報道の中で国の体質，国民性全体の問題として認識された結果，ハンガリーの好意度の低下をもたらしたものと推察される。

中国は，アテネ五輪のメダル獲得数は世界２位だが，報道自体は11位と低い。ニュースの中で個人名が提示されたケースも非常に少ない。前述のように，テレビニュースに登場する外国は日本と対戦する国が主である。日本人が活躍した種目の対戦相手に，中国人が少なかったため，中国はメダル獲得数が多かったにもかかわらず報道量が少なかったと考えられる。村田ら（2005）では，中国に対する否定的なイメージの変化は，五輪の影響というよりも直前に開催されたサッカーアジア杯での反日行動が関係していると論考しているが，本研究からも中国イメージの変化は五輪以外の影響によることが示唆された。

３．番組ごとの特色

本研究の分析過程において，NHKと民放のテレビ番組の差異が明らかになった。萩原（2001）によれば，テレビのニュース番組はNHKと民放とに大きく２分される。NHKは民放よりもハードニュースに力を入れ，定時のニュースは伝統的形式をとることで民放と差異を示している。またスポーツは通常はソフトニュースに含まれ，重要度としては低く認知される。このスポーツがニュースに占める量は，NHKと民放で大きな違いはみられないと結論づけられている。

しかしながら本研究の分析結果からは，NHKが五輪期間はスポーツに力をいれた報道を行っていることが示された。番組全体における五輪ニュースの割合は，NHKは民放２局を引き離して高くなっていた。放送時間自体も，NHKは番組時間を延長したり，間に試合中継を挟むなどして長時間化していた。アテネ五輪時の試合放送については，NHKが民放に比べて長時間編成を組んだことを冒頭で紹介したが，このことがニュース番組にも反映され，番組内で五輪情報の扱いが大きくなったものと考えられる。

McCombs ＆ Shaw（1972）が指摘するように，人々は今何が社会において重要な問題なのかをメディアに取り上げられた議題をもとに判断する傾向がある。特にNHKのニュース番組は民放のニュース番組より公正と認識されている（萩原・横山，2001）。五輪開催時にNHKが番組のおよそ７割の時間を割いてスポーツ報道をしたことは，多くの日本人に五輪が社会の中で重要なものというメッセージを送ることにつながっていたと考えられる。

４．今後の課題

本研究ではアテネ五輪を題材とし，テレビのニュース番組における外国・外国人情報の取り上げられ方を検討した。分析の結果，五輪報道は日本選手の紹介がメインであり，外国・外国人は日本の対戦相手として脇役に位置づけられるのみであった。また本分析では，五輪による外国のイメージ変化は自尊心維持のメカニズムによってよりも，その国に関するどのような内容がメディアによって提示されるかに強く関連していると結論づけられた。

ただし，これらの傾向は，非常に成績のよかったアテネ五輪に限定され示されたものである。例えば，日本選手が全く活躍できず，メダル獲得の報道ができない五輪では，外国人選手の試合結果について詳細な報道がなされる可能性がある。しかし一方で，日本が不振であると五輪報道自体が縮小するため，外国・外国人に関する情報は増加しないか，むしろ低下する可能性も考えられる。今後は，日本選手の成績が振るわなかった

五輪についても，メディアの内容分析を進める必要がある。

さらに，五輪が過去の歴史において様々な国で政治的に利用されてきた（池井，1992など）ことを鑑みると，自国選手の試合が報道の中心となる傾向は，日本特有のものとは考えにくい。今後は諸外国の五輪報道と比較対応させる中で，日本の報道の特徴を明らかにするとともに，五輪報道が外国イメージに及ぼす影響について各国の社会的背景などを含めさらに広い視点から検討することが求められる。

●引用文献

Brickman, P.,Redfeild, J.,Harrison, A.A.,& Crandall, R.（1972）Drive and predisposition as factors in the attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Experimental Social Psychology*, 8, 31-44.

萩原滋（1992）テレビにおけるニュース報道の分析―午後６時台と９時以降の番組比較を中心に―，慶応義塾大学新聞研究所年報，38，29-52.

萩原滋（2001）ニュース番組の内容と形式―娯楽化傾向の検証と番組の類型化―　萩原滋（編著）変容するメディアとニュース報道　丸善株式会社，76-114.

萩原滋・横山滋（2001）ニュースメディアの利用状況と信頼度評価　萩原滋（編著）変容するメディアとニュース報道　丸善株式会社，221-239.

樋口収・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・高林久美子（2005）アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(3）―市民調査の結果―日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 610-611.

池井優（1992）オリンピックの政治学　丸善ライブラリー

McCombs, M.E.,& Shaw, D.L.（1972）The agenda-setting function of mass media. *Public Opinion Quarterly*, 36, 176-187.

向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作（2001）アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化　社会心理学研究，16，159-169.

向田久美子・村田光二・稲葉哲郎・佐久間勲・樋口収・高林久美子（2005）アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(4）―類似性認知の変化とメディア接触の影響―日本社会心理学会第46回大会発表論文集，612-613.

村田光二・坂元章・高木栄作（1993）バルセロナ・オリンピックによる外国人イメージの変化(1）―研究の概要と単純集計結果―　日本社会心理学会大34回大会発表論文集，142-145.

村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収・高林久美子（2005）アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(1）―愛国心，ナショナリズム尺度の検討―　日本社会心理学会第46回大会発表論文集，64-65.

坂元章・高木栄作・村田光二　1997　アトランタ・オリンピックによる外国イメージの変化(1）―好意度の変化と持続―　日本社会心理学会代38回大会発表論文集，372-373.

大坪寛子（2004）番組の視聴効果とその持続性　萩原滋・国広陽子(編）テレビと外国イメージ―メディア・ステレオタイピング研究 勁草書房，Pp.122-144.

Sakamoto, A., Murata, K.,& Takaki, E.（1999）The Barcelona Olympic and the perception of foreign nations：A panel study of Japanese university students. *Journal of Sports Behavior*, 22, 260-278.

佐久間勲・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・高林久美子・樋口収（2005）アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(5）―競技結果の原因帰属―日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 614-615.

Schiappa, E.,Gress, P.B.,&Hewers, D.E.（2005）The parasocial contact hypothesis. *Communication Monographs*, 72, 91-115.

杉山茂（2004）アテネ・オリンピックでテレビ放送が残したもの　杉山茂・岡崎満義・上柿和生（編）アテネ五輪から見えたスポーツの未来　創文企画，Pp.6-16.

高木栄作・坂元章（1991）ソウル・オリンピックによる外国イメージの変化―大学生のパネル調査―　社会心理学研究，6，98-111.

高林久美子・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収（2005）アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ（2）―学生調査の結果―日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 608-609.

Zajonc, R.B.（1968）Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology, Monograph Supplement*, 9, 1-27.

（上瀬由美子　江戸川大学社会学部教授）